

■キーワード

比較文学 翻訳学 受容 日本近現代文学 創造的誤読

日本近現代文学における西洋作家の場合
受容と創造性

■研究の概要

本研究は、受容の問題を、受容する読み手の創造性という観点から検討します。近現代の日本文学に焦点を絞り、西洋文学を耽読し、それに強い衝撃を受け、そのことを様々な文章(序文、評論、書簡、日記、自伝など)に綴った作家や翻訳家あるいは評論家(上田敏、内田魯庵、小林秀雄、三島由紀夫、大岡昇平など)を取り上げます。無論、彼らは創造的な読者ですが、その「創造性」はどのように示されるのでしょうか。一般に、西洋文学は翻訳という形で日本人読者に伝えられますが、まさにこの翻訳書が興味深い研究対象となります。ランボーを訳した小林秀雄は、翻訳者のおかず誤読は「水のなかの水素」ほど多くあると述べています(『地獄の季節』初版あとがき参照)。小林の言う「誤読」とは、簡単に訂正できるような単なる誤りではなく、翻訳のもたらす「意味の追補」にかかわるものです。それは原文とは異質の要素であると同時にそれを豊かにするものです。小林の比喻を借りて言えば、このような創造的な誤読はそれほど多くなく、むしろ水のなかの「酸素」と言うべきでしょう。本研究が上記の日本人読者の評論や翻訳のなかに探求するのはまさしくこの「酸素の泡」です。その誤りを指摘するためではなく、豊かな誤読の原因を日本の文化や伝統、つまり日本的な考え方のなかに、あるいは翻訳者の思想のなかに見出そうとするためです。

■研究・技術のプロセス

原書と翻訳書を比較すると、翻訳書の大部分は原書の意味を伝えていますが、そのなかに「翻訳」というよりは文学創造であるような一節があることが分かります。本研究は翻訳者の創造性を示すこのような一節に注目します。翻訳者は翻訳しがたい箇所を「他の言い方」で表現するために様々な工夫をしますが、そこに創造的な営みが見出されます。それは一般的に読書および翻訳する過程で内的になされる営みであり、原書から受ける印象に、翻訳者自身の記憶や想像力から生じるものをうまく適合させようとするものです。翻訳における日本的なものは日本語に限らず、翻訳者が読者と共有する暗黙の了解事項、つまり文化に属するものも含まれます。日本文化の特殊性は翻訳書に点在する創造的な誤読という「酸素の泡」を通して現れますが、それによってこそ創作人物と同じく読者も作品世界に息づくことができるのです。日本における西洋の作家の受容、その移植の成否は、翻訳者がその作品に出会う読者を想定して行う発明や発見や創作にかかっています。



■セールスポイント

文学は書物の「なか」にではなく、書物を介して結ばれる書き手と読み手の関係にあり、「よき」読者とは開かれた心と協力精神をもって現に読んでいる作品の共作者となります。本研究はこの事実を理論化する試みです。